

### <随想>民俗探訪の旅 : 年譜のかげら

谷上, 久憲

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

160

(終了ページ / End Page)

163

(発行年 / Year)

1990-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019604>

# 民俗探訪の旅

——年譜のかけら——

「佐渡の最北端にある賽の河原を訪れたのは、もう七年ほどまえのことになる。両津の近くで旅館を経営している知人から、吹雪の季節が終わらなければとても無理だというしらせをうけていたわたしたちは、三月も中旬ごろだったか、上野を発った。だが、その日、東京は雪だった。（中略）連絡船は大揺れに揺れ、甲板に出ると、佐渡の山なみは雪で眩ゆかった。出発点から、わたしたちは近代的な交通機関の恩恵から見放されていたが、あとで思えば、それもまたこの旅にふさわしかったというべきであろうか。」

右は『悪場所の発想』（70年）の「序章」の書きだしであるが、「七年ほどもまえ」の佐渡行きも、今となればもう四半世紀も昔のことになる。そのころ先生は、大学の休みにわれわれ院生を誘っていくつもの旅をされた。それらの旅のことを親しく同行した者の一人として振り返っておきたい。

始まりは、一九六二年夏の吉野熊野旅行であった。六〇年安保の年『前近代の可能性』を出された後の廣末保先生は、市川から東中

野に転居された。この年の秋、西郷信綱先生は『詩の発生』を置土産にロンドンに発たれる。われわれの身辺も就職や結婚であわただしかった。われわれの当時の関心は「前近代」の民衆の歴史と文学にあり、またその信仰や芸能の理解の手がかりを得ようとしていた。

吉野熊野旅行のときは、山岳信仰の知見を得るため春から何度も研究会をもった。以下の旅行も事前の研究会を必ず行っている。七月三〇日に発ち、高野山（蓮華院泊）、吉野山（竹林院泊）を訪ねたあと、八月二日に念願の大峯山（山上ヶ嶽）に登った。メンバーに二人の女性がいたが、大峯は女人禁制が厳然としてあり、別の大日山（稻村ヶ嶽）に登ってもらったことが印象に強く残っている。山行はやはり厳しく、その夜男性群は山上の宿坊に泊まったが、居合わせた強力に先生が頂戴された山伏の兜巾と金剛杖が似合い、山中の一行は義経主従という感じがしないでもなかった。三日、山を下り洞川の桜本坊に泊まって精進落し。四日、十津川を下って熊野詣

谷 上 久 憲



1962年8月 吉野大峯山で  
(右から廣末先生、金安、岩崎、熊野、山本、谷上)



1963年3月 佐渡、願の賽の河原で

でに移り、本宮（湯峰泊）、五日に那智・新宮を見てこの旅は終わる。この旅の参加者は、先生のほか、藤田悠紀子・中原道子・岩崎武夫・金安定義・熊野健一・谷上の六名。（この年の十二月八日先生のTVドラマ『初音の鼓』がNHKから放映された。）

六三年春の佐渡行きのみえ一月二〇日には、栃木岩舟山の賽の河原を訪ねておられる。先生は当時から写真にもこっておられ、『もう一つの日本美』（65年）の扉を飾っている「賽の河原」の写真はこの岩舟のものである。

二回目の旅行は六三年三月の佐渡である。同行者は岩崎武夫、山本吉左右と谷上の三名。三月二五日、冒頭にあげた先生の印象記のごとく、悪天候のなか、しかも「一行四人のうちの一人があらわれなかった」という失態を私が演じ、散々な始まりだった。二六日は真野御陵・国分寺などを見て新穂村に泊まり、翌朝両津から内海府を行く土地の船便で鷺崎に着き、そこからまだ道らしい道のなかった外海府を歩くことになる。烈風に鳴る虎落笛を聞きながら弾崎を越え、石ばかりの海岸に賽の河原を見つけたとき、なぜか懐かしい場所に来た思いがしたものだ。願の部落を出て、海岸段丘の細道を歩くうちに日が落ち、暗くなってやっと真更川の小家にたどりついた。次の朝は目のくらむような断崖を下り、小舟を借りて岩谷口まで波路を行くといった、いわば落魄の身をさらす思いの道程であった。この日のことは、『悪場所の発想』の「序章」に詳しい。また同著の扉の写真は、先生が撮られたその時の海浜の光景である。二八日には小木、宿根木付近の石仏などを見て歩き、二九日に新穂村に戻って、その夜、宿舎で末広座の文弥人形、広栄座の説経人形と

のろま人形を、即席の舞台づくりも手伝いながら見た。谷上は残留して矢柄繁栄座の文弥人形も記録した。

三回目は同じ六三年夏の東北旅行である。同行は岩崎武夫・金安定義・谷上の三名。七月二〇日に発ち、二一日、恐山の地藏盆のイタコの口寄せを目にし耳にし、宇曾利湖の地獄めぐりをした。死者の語る非運の嘆きは、やはり胸にくるものがあり、今も耳底に残っている。二二日、下北半島のまさかりの刃の中ほどに位置しているほけ浦を舟で訪ねる。灰白色の奇岩の列は、その名とともに恐山と対応している印象であった。その夜は佐井で宿泊し、二三日は船便があつたのであえて大間から函館に渡り、連絡船で青森に戻る。その方が時間的に近いのである。その日は津軽川倉の地藏堂を訪ね、鱈ヶ沢に泊まる。二四日は弘前の久渡寺を訪ねオシラサマを拜む。この旅行はおもに津軽の土俗的な信仰を探る目的をもっていった。説経「さんせう太夫」ゆかりの岩木山神社を訪ねたのもその一つであった。その夜泊まるあてもなく、夕刻に岩木山麓の温泉に迷いこんだが、コの字型に配置された二階建ての宿の中庭に入ったとき、まわりの部屋からの異様な視線に曝されたわれわれの驚きはたとえようがなく、ほうほうの態で逃げ帰ったことを思い出す。そしてその夜たどりついた安普請の宿で、荒ぶる先生にオイチョカブを挑まれた、三人とも散々負かされたことが懐かしい。あの温泉は土地の人の農閑期の湯治場で、たぶん段ノ湯というのだと思う。

六四年三月の一四、一五日の両日には、岡崎と小牧に行った。矢作誓願寺に浄瑠璃姫と義経の画像を見、成就院の浄瑠璃姫の墓を訪ねるのが目的であった。またの日は豊饒祈願の巨大な男根を担ぐ小

牧田<sup>たがた</sup>県神社の祭礼を見た。岩崎・熊野・山本・谷上が参加。

この方式とメンバーによる最後の旅行は、六四年夏の九州旅行であった。この時は、八幡信仰が研究課題であったが、ほかに九州の芸能探訪の目的もあった。同行は岩崎武夫・金安定義・熊野健一・山本吉左右と谷上の五人。八月四日に東京を発ち、五日に博多志賀島を見る。六日に中津山国川河口の古表<sup>こひょう</sup>神社の祭で行れる神相撲を見る。社殿には神々の小さな装束が無数に懸けられていて美しかった。乾衣祭と呼ぶ。夕方境内の舞台で人形操りの起源に近いと言われる神相撲が行れる。取り組みの終りは、小兵で黒肌の住吉神が大柄な祇園神以下の神々を一気にうち負かす笑いの舞台であった。翌朝は沖で行われる古表神社の放生会をわれわれも船に乗せてもらい見学した。近くの古要<sup>こよう</sup>神社の神人形も見る。八日、宇佐八幡神宮を訪ねる。九日宇佐近郊の北原<sup>きたばら</sup>部落に、老齢の人形師中村政之助を訪ね話をうかがう。十日、延岡の奥の高千穂に移り、上野村の柚木野人形の部落を訪ねる。尖底のぐい呑で球磨焼酎をふるまわれたことが印象に残っている。翌日も高千穂の天岩戸神社などを見て歩いた。十二日、宮崎の生目<sup>いくも</sup>神社の景清廟を訪ね、また琵琶法師の消息を尋ねるハプニングもあった。この時のことは先生の『もう一つの日本美』の「残骸探訪―日向の旅」に詳しい。その夜は「落ち行く先」を人吉に決め、ようやく人心地がついた。

近著『新編・悪場所の発想』（筑摩叢書'88年）には、「遊行的なるもの」と「悪場所的なるもの」の主な論文が二つながら収められ、先生は△あとがき▽で両者の成立事情について説明を加えておられるが、六〇年代前半の先生の旅行は、それらの主題が進められてい

く動機あるいは源流に位置していると思う。その現場に立ち合う機会にめぐまれたわれわれもまた、先生にけしかけられ、現地に追い立てられて、はかりしれない刺戟を受けたのである。